ことぶき「なか」だより
No.199
2022.3

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 205
Tel.（045）671-1109
振替　　00200 － 1 － 47369
E-Mail : naka-ch@hb.tp1.jp　　HP：http//church.jp/naka/
発行者　なか伝道所／編集委員会　　（題字　松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

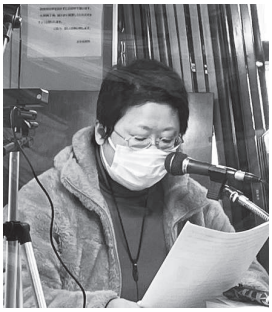
集会　主日礼拝　日曜日（第1・第3・第5）
午前10時30分より

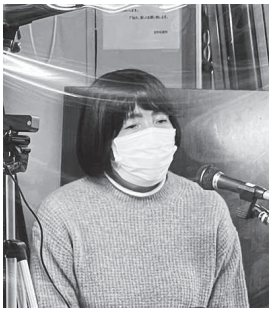
これからのなか伝を考える⑤

どんな教会を目指すのか、私達の教会観と牧師招聘

なか伝道所は、現在、無牧で、横浜磯子教会の中村清牧師に代務協力を頂きながら、伝道所に集うみんなで聖書を読み、思いや考えを分かち合い、これからを考え続けています。「宣教方針」を読み直し、寿地区にある伝道所の立ち位置、「地域」や社会、世界との関わりを考えながら、「イエス」と、私たちの生き方を探しています。

今号では**「どんな教会を目指すのか、私達の教会観と牧師招聘」**のテーマで、三人のなかまの思いを紹介します。


金丸千代


竹内すなお

私と教会

竹内すなお

今回「私の教会観」について話してもらえないかというお話をいただきここにいるわけですが、自分にとっての教会について、聖書を読み祈り考える機会をいただけたことをまず感謝申し上げます。なか伝道所に通うようになってから、一度も考えたことがなかったような気がします、ごめんなさい。

私は小学生の時に教会に通っていました。楽しかった思い出ばかりです。聖書や賛美歌の言葉の意味もわからずそらんじたり歌ったりしていました。教会で結婚式があるとみんなで賛美歌を歌いました。今でも当時の賛美歌（賛美歌第二編）の歌詞が身体に染みついています。その時覚えたみことばが、その後の生活の中に生きていたと思います。もしかするとこの時の体験が「私と教会」の基になっているのかもしれません。大人になってまた教会に行くようになりました。当時はめずらしかったHPのある教会でした。

礼拝の前奏を聞きながら心を静め整え、砕かれた心で受け入れることができるようにと祈りました。

賛美も大好きで、歌っていると喜びや力をもらえていました。説教を聞きながらわからないところはメモをし、心に残った言葉を刻み、「祝祷」でチカラをもらい、「派遣」で明日からの自分を奮い立たせ、後奏を聞きながらみことばを自分の中に落とすそんな礼拝がありがたかったです。私はメッセージを自分の中に落とすには時間が必要なのです。

礼拝後は、聖書を知りたい、質問したい仲間たちとご飯を食べながら、伝道師も加わり、語り合う時を持ちました。今思うと本当に貴重な時間でした。聖書研究会にも通い、聖書の疑問に答えていただく機会もありました。

野宿の方々の支援の中で知り合ったカトリックの方からは黙想会や聖書を味わう会、「テゼの歌」を使った黙想と祈りの集いを教えていただき、「アシュラム」にも参加しました。テゼの黙想と祈りの集いは今も通い、一日黙想会にも機会があれば参加しています。何より、当時は夜九時まで開けていたお聖堂で毎日仕事帰りに祈りの時を持ち、神さまからのメッセージを聞こうとしたこと

が、私の生き方そのものへの糧になっていたと思います。

毎年十二月二十四日の夜は、カトリックの司祭と数人の信徒とで小さな祈りの家でミサを捧げています。「パンをどうぞ」と言ってくださるのですが、私はみなさんのように聖変化したパンを本当の意味で糧にできないのでお断りしていました。キリストの身体とは思えないのです。でも、なか伝道所での「パンとぶどう酒」がなくなってから、「求めている自分」がいる事に気づいたのです。単なる儀式であってもなくても同じと思っていたはずなのですが。

先日、たまたま当時伝道師だった方が牧会する教会のオンライン礼拝に出席しました。「聖書から神さまのメッセージを受け取る」という言葉に、本当に自分が求めていることはこれなのかもしれないと、腑に落ちた感覚がありました。神さまへの信頼、信頼するが故、耳を澄ますこと・・・

教会は人の集まりです。「一致」は難しいだろうと思います。神さまが教会の基となっていること、牧師と共に迷いながら祈りながら教会の有り様を模索するしかないのかな、と思います。共に聖書から神さまのメッセージに耳を澄ませ悩んでくれる人が与えられるといいなぁと思います。

私は六月から仕事が関内に異動となり、仕事の合間に山手教会で祈る機会が増えました。そんな中で、自分なりに耳を澄ませ、与えられたのが「逃げる」という言葉です。目の前の壁にぶつかったとき、壁しか見えていない時はつい乗り越えようとして傷を負います。逃れの道も備えられている、その道を歩いてもいいのだと。

私の教会観と牧師像

金丸千代

私の理想的な教会とは、多様であたたかみのある牧師や仲間たちとともに礼拝を守ることができ、終わったときに来てよかったと思える教会です。「カタルシス」という言葉をネットで検索すると「心の中に溜まっていた澱（おり）のような感情が解放され、気持ちが浄化されることを意味する」、と出てきますが、私が教会に求めているのはまさに「カタルシス」です。

具体的に五つの項目に分けて、私の教会観や理想の牧師像について述べます。

①敷居の低い教会

どんな人でも受け入れる敷居の低い教会がいいと思います。特に「寿」というドヤ街にあることから考えて、日雇い労働者・生活困窮者・子ども・お年寄り・病人・障がい者・聖書を知らない人などに対して理解があり、安心して礼拝に来ることができる教会が理想的です。

私の友人に、ある教会の長年の信徒で、精神障がい者の方がいます。昨年、その友人が通う教会に、親が都内大教会の牧師である新任教師が、牧師として赴任してきたそうです。牧師が代わってすぐの祈祷会に友人が参加したとき、その新任牧師に「要するに○○さんは、教会に自分の話を聞いてもらいにきているのよね？」と心ない言葉をかけられ、それ以来教会には行けなくなりました。牧師も信徒も弱く小さくされた人々に対して理解ある声かけができる、そのような教会でありたいと思います。健常者のインテリや中産階級や有力者が中心となって形成されているような一部の教会とは一線を

風景

ここ数年、毎年三月に、職場の日本ＹＷＣＡから「ＮＧＯとして参加」してきた「国連女性の地位委員会（ＣＳＷ）」の準備が、今年も始まった。

ニューヨークの国連本部で行われる会議に合わせ、世界中の女性団体から集まった参加者が、ワークショップを開催したり、本会議の決議内容についてロビイング（各国政府代表に話しかけたり連絡を取って情報提供や提案を届け、ＮＧＯが求める決議内容に近づくよう働きかけること）をしたり。

参加する個人としても学びと刺激いっぱいの経験になるが、同時にＮＧＯの、特に若い女性たちが「そこにいる」という存在感が、国連会議が女性たちの権利と声をきちんと反映していくために、とても大切だという要素がある。しかしコロナウイルス感染症の流行で、オンライン開催となって三年目。やはり直接行くのとは全く違う参加方法になるが、その特徴も活かしつつ、参加する若い女性たちにとって少しでも良い経験になるよう準備を進めたい。

（小笠原純恵）

画すべきではないでしょうか。

②牧師も信徒も、一人一人が教会の対等な構成員なのだという自覚

前任牧師在任中の私たちの失敗も踏まえ、牧師も信徒も一人一人が教会の構成員なのだという自覚が必要であり、またそれぞれが責任を担うことを覚悟すべきだと思います。前任牧師時代、私は、乳がんの手術や療養のためほとんど礼拝に出席できませんでしたが、それでも彼女が苦しんでいたことは知っています。

牧師を招聘した際には、牧師一人にすべてを押し付けるのではなく、伝道所の運営上で生じるさまざまな「雑務」を分担するのが理想的です。私もできるだけかかわっていくようにしなければならないと考えています。ですから牧師を「先生」と呼ばず、一人の対等な仲間として受け入れることが重要なのではないでしょうか。

③底辺に身を置いた聖書理解

新しい牧師には、聖書は一部のインテリやお金持ちのためだけの書物ではないことを自覚していただき、イエスがその運動の中で繰り返し実践していたように、社会の中でさまざまな意味で弱く小さくされた人々に重きをおいた聖書理解を強く求めます。

④受洗の有無にかかわらず、皆対等

本田哲郎神父が述べているように「洗礼を受けた者が地の塩、世の光なのだ」という考えは捨てた方がいいと思います。受洗の有無にかかわらず、皆が等しく大切にされる教会が理想的です。ですから聖餐もオープン聖餐がいいでしょう。

⑤共に神の国を実現するために祈り働く教会

私は以前、他の教会の方に社会問題について話した際、「千代ちゃんの教会は社会派なんだね」と言われて驚いたことがあります。実社会から目を背け、観念の中だけで教会生活を送ることは簡単です。しかし、社会で問題が生じたときに「では解決されるように祈りましょう」と祈ることも大切ですが、それだけでは何の解決にもなりません。共に行動を起こす教会であることが大切だと思います。

共同体としての最後の砦

松田祐作

昨年よりお世話になっている松田と申します。私は洗礼をうけていない。生い立ちやキリスト教に興味を持った経緯、そしてなか伝について思うところなどを述べたいと思う。

私は教育熱心な温かい両親のもとに生まれ、何不自由なく育った。所謂「いい大学」を出て「いい会社」に入り、家庭を持った。三十一歳のころ、思い立って転職をした。大手日本企業から飛び出し、自らの力で市場価値を高め、経済的・精神的「自由」を手に入れようと外資系コンサルティングファームへ入社。努力をすればその分必ず成長できる。自信があった。

しかし入社後自信はもろく崩れ去る。厳しい競争環境で慣れない仕事。そしてコロナ禍に突入。リモートワークで人の繋がりも希薄。その中で成果を求められるプレッシャー。孤独と不安に駆られるようになり、不安を解消すべく、宗教や哲学の書籍を読み漁った。その流れで聖書にもトライした。難解だったが、旧約聖書に出てくるイスラエルの民に自らが重なって見えた。自らの力を過信し、自由であると思い込み、そして脆くも打ち砕かれる。

そもそも「自由」とは何か。リベラル＝善とされる現代、自由の価値が叫ばれる。何を食べるか、何を信仰するか、誰に愛を告白するか、どの政党に投票するか、民主主義であれば人に迷惑をかけない限り確かに個人の自由だ。自らの欲求に従って行動する、という次元においては皆自由である。しかし、「人は自らの欲求を選べるか」という次元において自由はない。自分が「何を食べたいと思うか」「誰を愛するか」「何を信仰したいと思うか」「どの政党に投票したいと思うか」、決して自分でコントロールできない。事実、妻や子を愛せないと苦しむ人、アル

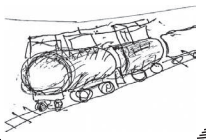
えーとねえ

関内駅ホームで、父と子の会話

横浜の電車はやだ！…息子

なんで？？…父

貨物列車がくるから！！長いから！！…息子



コール中毒で苦しむ人は多く存在する。人は自らの欲求に従って行動するが、自らの欲求を選び取ることができないとすると、自由とは何だろう。私は自由意志のもと自分の力で社会的な地位を得てこれからも成長できる、と考えていたが、そもそも「自由意志」などは無かったし、真に自分の力で得たものなど何もないことに気付いた。では何が人を動かし、社会をつくっているのだろう。偶発的インプットと論理的プロセスによって動くＡＩのようなアルゴリズムのみによって人は動くのだろうか。または聖書にある神様が存在し、全てをつかさどっているのだろうか。私には分からない。しかし前者だとすれば、全ては偶然に過ぎないこの人生に、この社会に何か意味はあるのだろうか。そう考えると、何を信じるべきか分からないながら、私は「お祈り」をするようになった。

自分では何もコントロールできないことを認め、「なにものか」に全てを委ねて、祈る。そして「なにものか」の意思を自らの欲求や考えの中に見出し、その意思に沿って行動する。宗教ってそういうことじゃないかと思えた。

詩編一三九編「神よ、どうか、わたしを探って、わが心を知り、わたしを試みて、わがもろもろの思いを知ってください。わたしに悪しき道のあるかないかを見て、わたしをとこしえの道に導いてください。」

このダビデの祈りに深い共感を覚えた。そして教会に通うようになり、一時期受洗を考えたが、家族の反対を受けてやめた。反対を押し切るほどの強い信仰心はなかった。死ぬまでには受洗したいと思いながら、それも神様にお委ねしようと、今は都合よく考えている。

第二子を授かって手狭になった東京のアパートから横浜へ引っ越し、横浜でも居場所となる教会を探したが、大きな教会には何となく居辛さを感じ、「なかでん」に流れ着いた。他者に無関心な大都会において、信者でもない私をこうも暖かく受け入れてくれる場所は他にはないだろう。生い立ちや考えが異なる様々な人が一同に会し、互いを受け入れ、ともに祈る、無縁社会ともいわれる現代において、「なかでん」には共同体としての最後の砦としてこれからも細くとも長く続いて欲しい。

まど

寿地区では、年末年始に「第四十八次寿越冬闘争」が行われました。「寿越冬闘争」とは、公的機関の窓口が閉まる期間、公園に大きなテントが建てられ、炊き出しや夜回り、医療・法律・労働の相談が行われる、一人一人の命をみんなで守る活動です。テントの建て込みから始まり解体作業まで、一年に一度、たくさんの方々が全国各地から集まってくる日々でした。一年ぶりに会う懐かしい顔、寿に初めて来る新しい顔、その中に、礼拝の前に炊き出しの野菜の切込みに来ていたり、配食前の空き時間に「行って来たよ」と礼拝の様子を教えてくれる、なか伝につながる仲間がいます。公園と伝道所を行ったり来たりしている様子を遠目に見ていて、今頃きっと越冬のこともお祈りしてくれているだろうな、と心強く思いました。仲間の祈りに守られて、私の担当する寿医療班は、ＡＥＤ（自動体外式除細動器）の登場や救急搬送もありましたが、亡くなる人は一人もおらず、無事に越冬を終えることができました。

（沓澤則子）

編集後記

三月より静岡県に引越すことになりました。宇佐美教会にお世話になろうと考えていますが、なか伝にも時折顔を出したいと思いますので、引き続き宜しくお願いします。　松田祐作